

学生と教員で作る文理融合リベラルアーツFD公開フォーラム

文理融合リベラルアーツ科目を担当して

— 担当教員による「系列として目指すもの」 —

「色・音・香」系列

新井 由紀夫 (人間文化創成科学研究科 文化科学系)



「色・音・香」系列の新井由紀夫と申します。私は専門がヨーロッパ中世史なので、色・音・香ということについてずっと研究してきたわけではないですが、今日は先生たちの発表をずっと聞いていると、熱い、冷たい、熱いという感じなので、今度、僕は冷たくやったらいいのか、それともエントロピー拡大の法則で、平均的な方がいいかなと、ちょっと考えていました。

私の話は、前半が系列全体について、あるいは学生がどう取っているかということについて、後半は、私が2年間やっている、この系列の演習科目「感覚の歴史を読む」という演習について考えたことをお話ししたいと思っております。

まず前半です。系列として目指すことについては右に書いてありますが、ホームページをご覧になっていただければ、こういう言葉で書いてあります。

ちょっと難しい言葉で書いてあるので、やさしい言葉で自分なりに見方を変えていうと、色・音・香という非常に身の回りの取っつきやすいテーマから入っていき、そこから芋づる式に、現在存在しているさまざまな学問分野へと自分が手を伸ばして視野を広げていけるようにすることとか、あるいは一つのことに對して、本当は系列も一緒だと思いますが、幾つかの切り口を変えて、「今度はこちらを切ってみよう、今度はこちらから切ってみよう、そうするとどう見えるかな」みたいなことをやったり、幾つかの視点を結び付ける。この幾つかの視点を結び付けるというのが、文理融合がうまくいけば、文系的な視点、あるいは理系的な視点をそれぞれ持ってきて結び付けて考えたら何か新しいことが分かるかなと考えたりと。そういうことを自分で進んでやれるような力、試行錯誤する力を学生さんたちに付けてもらうために手助けをするということが、「色・音・香」の系列の目指すところだと思っております。特に私が担当している演習は、そういう色彩が強いと思います。

これは「色・音・香」系列についてのホームページを見ると出ています。どういう分野に授業科目がかかっているかという表ですが、人文系の科目、いわゆる昔の教養科目でいうと人文系、社会系、自然系と分かれますが、それぞれから出したものが、ただその科目がそのまま出るのはなくて、つまり、先ほど学生さんが「先生たちも苦労してかわいそうですね」「そんなに苦労しなくてもいいんじゃないの」と言いましたが、それぞれ出している人たちは、ちょっと変えていかないと。例えば「おいさと色・音・香」は、理系の先生と文系の先生が一緒になって一つの時間を構成すると。両方でしゃべりっぱなしではなくて、両方がミスマッチなものを、クロスオーバーなことを話し合って考えようみたいな授業をやったり、あるいは「情緒と発達心理学」でも、発達心理学と発達臨床学だけではなくて、自分たちの身近なものからいろいろな視点で切り口を変えて考えていくと、それが社会学につながっていくとか、歴史学にもつながっていくとか、そういう授業を心がけてやられています。宗教も、専門の宗教倫理のことをやるのではなくて、それは基本なので絶対押さえますが、例えば儀礼とか、身近なものからそういうものを考えることで、少しでも宗教についてちゃんとした知識を得てもらって、その知識を得ることがカルト系の宗教に自分たちが陥っていかないためのまず第一歩だということを話しているとか。そういう感じで先生方がやっています。コンピューターは、割と先生がコンピューターで映像や音、人間の感覚を再現するような、目に見えるものにしていくということを考えてやられているという形です。それぞれちょっとは苦労して、中で混ざっ

「色・音・香」系列「感覚の歴史を読む(演習)」を2年やってみて考えたこと

第3回 学生と教員でつくる文理融合リベラルアーツFDフォーラム
第2部 「系列として目指すもの」～【色・音・香】系列
新井 由紀夫 (所属) 人間文化創成科学研究科 文化科学系
平成22年1月20日(水)

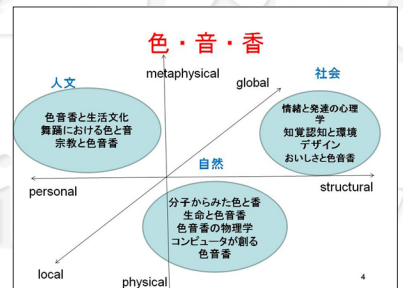
系列としてめざすこと

- 色・音・香という身近な感覚、感性を共通の切り口とし、自然の原理と我々の文化、社会について学びます。... 色・音・香を通じ、自然現象とその法則を学ぶとともに、人間(生物)は自然界の情報や社会的、文化的な情報をいかに認識、受容、利用していくのか、また人間と自然そして社会との相互作用についての理解を学びます。

ホームページより (http://www.ocha.ac.jp/la/guide/c_s_s.htm)

みかたをかえていうと...

- 色・音・香といった身近でとつきやすいテーマから入っていくことで、そこから芋づる式に様々な学問領域へと視野を広げていけるようにすること。
- ひとつのことに對して切り口をかえさまざまな視点から見たり、いくつかの視点を結びつけて新しいことを考えたりできるような力を自ら身につけてゆけるよう手助けをすること。

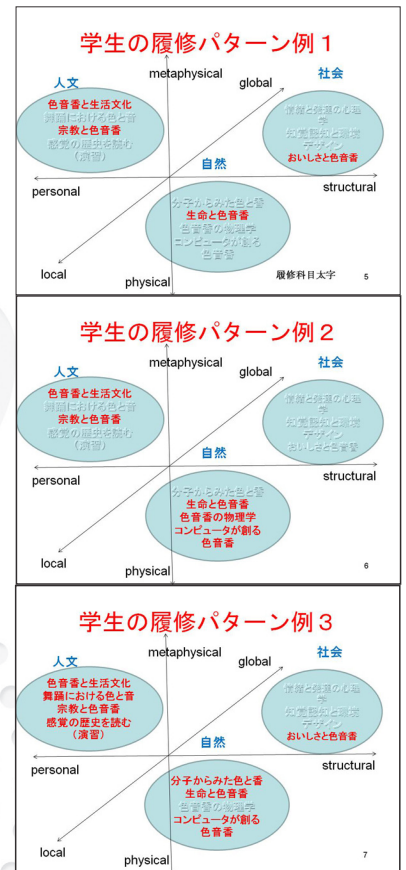


て、テーマや関係性について、それぞれ考えながらやっているという状況です。

実際に今、学生がどういうパターンで取っているかを見ると、2年間しかやっていませんが、パターン1がほぼ大部分の学生だと思います。正確にパターン分析したわけではないので、履修のデータをちょっと見せてもらって得た印象ですが、赤で出ているのが実際に取っている科目です。多くの人は四つぐらい取っていて、ぱらぱらと取りやすいものから取っているということが多いと思います。これは割と文系の人に多い。

あるいは理系の学生さんは、やや自然系のを主に取って、必須外の講義で取りやすいものを取ると。こういう形が割と理系の人には多いです。

中には多く取った猛者の人がいて、七つも取っていて、こういうふうにとっている。「情緒と発達の心理学」は今やられているのでちょっとデータがないわけですが、実際、どう取っているかを見てみると、学生さんの所属によってパターンがある程度決まっています。先ほど梅田さんや山下さんが言われましたが、実際には自分たちの関心のあることを取っているので、文理をうまく融合して取ってもらうという学生さんは非常に少ないということは、このパターンからも言えます。



系列でとる意味はあるか

- 現状では、系列としてのつながりを学生に対して明確に提示できているとは言いがたい。従って系列でとる意味があると考えられる学生は少ない?

「身近な安全を守ることを考える」ように、目指すゴールがはっきりしているわけではない。
→ はっきりした目的をもとめない、その他大勢がこの系列科目をとっているという印象

実際に系列で取る意味はあるのかということを考えますと、現状では、系列としてのつながりを学生さんたちに対して明確にわれわれが提示できているとは言いがたいので、系列に意味があると自信を持って言える学生は少ない。多分、学生さんが4年間が終わって胸に手を当てて、「賞状もらえたけれどもいいのかな」みたいな。先ほどから賞状というので私たちも賞状で統一したいのですが、紙が問題なのです。何でそれを取ったのか、もらえる理由は何なのか、そういうことをなかなか考えられないという状況があると思います。

「色・音・香」を系列としてまとまりがないと考える学生は多いと思います。「ジェンダー」、「あなたが変わる。あなたから変わる」とか、あるいは生活の中から安全を考えていこう、「生活世界の安全保障」とか、それぞれはゴールが非常にはっきりしています。とてもはっきりしたゴールを提示できるので、はっきりした目的が分かるので、それをもらおうと何となくそれが身に付いたような錯覚に、どっちみち錯覚なのですが、錯覚に陥るわけです。われわれのところは、「『色・音・香』、何それ」みたいな感じになってしまうわけです。

先生たちの話を聞いていても、学生に聞いても、はっきりした目的を求めないで、取りあえずその他大勢で、やさしそうだなとか、「色・音・香」、どこかに興味があるから取ろうとか、そういうその他大勢の人が取っていて、非常に多くの履修者がいるというのが、この系列の特徴です。

ですから、例えば先ほど梅田さんが言われましたが、「色・音・香」の違いが分かる人間をつくるみたいなことはできない、目指してもいないということになります。

では、どうしたらいいのかということで、本当はここでコンセプトを磨いたり、はっきり提示できればいいのですが、われわれ系列単位で話していても、どうコンセプトを磨こうという話になると黙ってしまうわけです。難しいです。むしろ系列間の位置付けの中で、系列だけの先生方のお話を聞いていると温度差があるわけで、そういうものも系列の違いを含めて総合的に学生に提示していく中で、われわれの系列はどこに当たるのだろうかみたいなことを考えていく必要があります。

もう一つは、学生さんにお任せするということがあります。学生さんたちの中で系列で5個以上取った人に1回集まってもらって、系列の場みたいなものを、シンポジウムみたいなものをして、例えばこの学とこの学はこう関係していますとか、あるいはそう結び付いてもいいのだなということを考える場で一つヒントをもらって、それによって疑問があったら面接やレポートを受けて、そしてその相関関係をみんなで考えて、賞状をもらう、あげるというやり方がいいかもしれないと考えています。

ではどうしたらよいか？

- 「同系列で5科目以上履修した人を系列ごとに集めて、自分のとった5つの講義に見られるつながりや違いなどを、(授業担当者や学生間での)討議を通じて理解を深めることができるような場」(2009年2月12日のLAFDシンポでの意見)
- 学生が自分でその意味を考えることができるような手助けが必要～科目間の相関図や関係性を見つけるためのキーワードなど。

ただ、誰がそれを採点するのだろうか、いろいろ問題は出てきますが、以上がわれわれの系列で話していることです。

もし可能ならば...

- 系列5科目以上の履修者に、系列でとった科目間の関係性についてレポートを提出させることで、自ら考えさせる。必要なら添削し返却あるいは面接をしたうえで、履修証明を出すことも一案。

「感覚の歴史を読む(演習)」より
～文理融合の視点から

- 1回に担当者2人が、それぞれ感覚の歴史に関する本を一冊紹介し、相手の報告の司会をする方法。
- 図書館のLAコーナーにみんなで出かけていて、本を手にとってあれこれと探ることが大切。
- メンバーは、人文9名、言文4名、人社2名、以上15名が文教で、生活文化4名、人間・環境1名、生物1名、食物栄養1名、計22名に聴講上級生2名(2008年)。

あと、「感覚の歴史」という演習をやってみて、そこで具体的に分かった話や、やってきたことを説明いたします。この「感覚の歴史を読む」というのは、1回毎に、学生さん二人がそれぞれ時間を半分に区切って1冊ずつ、2冊紹介します。そのときに、相手の司会をしたり、読んでいくレジュメを作ったりということをやるわけです。2回目には、図書館のLAコーナーに出掛けていって、一緒に手を取ってどの本を読もうかとお互いにやると。いつも図書館の人に「ちょっとうるさいです」と怒られますが、やはりしゃべって一緒に考えることに意味があるので、「すみません」と言いながら使わせてもらっています。

実際に取った学生さんは、去年はこのように文教が15名、生活文化が4名、人間・環境1、生物1、食物栄養1でした。ある程度はばらけていますが、実際に読んだ本のリストがこれです。レジュメの方にも載せてあります。

基本的には歴史の本で、感覚に関係するようなものを選んでおります。

2008年度扱った本(1)

- 04/26 笹本正治『鳴動する中世:怪音と地鳴りの日本史』
松原秀一『中世ヨーロッパの說話:東と西の出会い』
- 05/12 徳井淑子『色で読む中世ヨーロッパ』
小松和彦『神隠しと日本人』
- 05/19 ミノン 『甘さと権力:砂糖が語る近代史』
バスターロー『牧草の歴史:ヨーロッパの色と私たち』
- 05/26 南直人『ヨーロッパの音はどう変わったか』
十九世紀食卓革命』講談社 1998年
マックス・リュティ(小澤俊夫訳)『ヨーロッパの音:その形式と本質』岩崎美術社 1969年
- 06/02 バスターロー『書物の歴史』
山本秀行『ナチズムの記憶』

2008年度扱った本(2)

- 06/09 原田信男『和食と日本文化』小学館 より古代から近世
徳井淑子『服飾の中世』
- 06/16 角山栄 『茶の世界史:緑茶の文化と紅茶の社会』
笹本正治『中世の音・近世の音』
- 06/23 小塚和明『説話の声:中世世界の語りうた・笑い』
小池三枝『服飾文化論:服飾のみかた・読みかた』
- 06/30 塚本尚也『色彩の歴史と文化』
クラッペンアローマ:匂いの文化史』
- 07/07 乾正雄 『夜は暗くはないのか』
マルソーフ編の世界史』
- 07/14 テポルト『中世のパン』

演習のようす

- 文系はあくまでテキストの本に忠実に細かく要約
←→ 理系の学生はそれと比べておおざっぱであつてもポイントをつかみ、それをきっかけに皆で議論しようとする。
- 議論により、色や甘さの感覚、異界(未知のもの)に対する怖さといった感覚 = それぞれ人間が生物として、もともと体の中の仕組みと必然的(先天的)に関係している部分と、多様な人間社会の営みのなかで歴史的・文化的に後天的に形成されてきた文化の側面があり、両者のやりとりのなかでものを考えることを理解。

演習の様子ですが、文系の学生と理系の学生で、まだ1年生なのに、最初からやはり対応が違います。そこが面白いところです。文系の人は、とにかくテキストを読む。テキスト絶対だという感じで、いかにきれいにまとめてくるか、あるいはレジュメをいかにたくさん厚く作るかということに命を燃やします。そこで燃え尽きてしまうのですが。

理系の人は、つまみ食いでもいいのです。ぱっぱぱつと読んできて、すぐく大ざっぱに論を立てて、「おお、大胆」と思いますが、そこから何かをきっかけに考えようとするのです。例えばそういう考え方の違いをお互いにやり合うという場が非常に面白いことだと思います。

また、何回かやっていて、今日はLAの授業をやっている先生方皆さんおっしゃいますが、自分たちが扱っているテーマは一つに限らないので、いろいろなアプローチが可能だということを強調されますが、色や音や香、つまり感覚、あるいは感覚にのらない、感覚以外の世界の問題、そういうものはもっと文系や理系の視点を入れてクロスオーバーで考えていくと面白い問題だとつくづく思います。

演習のようす(1)

テーマ「アジアやヨーロッパの「説話」にみられる食のタブーから食べてはいけないものや、習俗の意味を考える」

↓

生物の食として有毒なものとの関係を発言(理系の学生)すると、文系の学生はその文化的意味を問い、議論が活発にすすむ。

例えばアジアやヨーロッパの昔話とか、そういうものに食べ物のタブーの話が出てくるわけです。食べてはいけないものが出てくると。イスラム教はなぜブタを食べないのかとか、そういう原理を考えていく、あるいは習俗の意味を考えるというテーマだとすると、理系の人からは、でも生物として人間が食べて毒になるものがあるから、まず文化的なタブーの前にそういう問題を考えなければいけないし、そこから案外タブーが来ていることもあるという議論が出てきます。そうすると人文の学生は、でもそこには文化的な、歴史的な培った意味が出てくるのではないかという話をやりとりして、議論が進むということがあります。

演習のようす(2)

テーマ「音」

現代人は昔の人が持っていた豊かな音の心性を失ってしまった(鐘の音や雷鳴にも意味)のは?

↑

いや現代人は、「死者からの電話」、「部屋で冷蔵庫が異様に高く聞こえる」など、人工音に対して独特の音の想像力を持っている。
○一方向的でなく、いろいろな見方で考える

あるいは音についても、中世や近世の人は暗がり怖く、何か音がすると、神様が何か怒っているのではないかと、いろいろな解釈が可能でした。それは、昔の人が持っていた音に対する豊かな心性を今の人間は失っているとレジュメに書いて、そういう研究書を読んで「そのとおりだ」と文系の人は言うのです。でも、そうすると理系の人は、「いや、そんなことはない。

現代人は、例えば『死者から電話が来た』とか、あるいは夜、一人で部屋にいてしんとしていると、冷蔵庫の音がやけに大きく聞こえるときがある、何か意味があるのではないかと。つまり、現代の人間は、人工音に対して、昔の人が持っていなかったような独特な音の想像力を持っていて、昔の人が偉かったのではない。現代でも、現代なりの音の想像力はあるという話をしました。

こういうふうに、一方的ではなくて、いろいろな見方を一緒にやっていくということに意味があるだろうと思っています。

ただ、あと1点、昔あった基礎ゼミの学生さんの履修状況と比較してみると、ちょっと問題点が浮かび上がってきます。これは平成13年ですが、右のかっこの中に入っているのが担当した学生さんの所属学科です。例えば理系の人が同性愛の話を読んで、同性愛というのは遺伝子の病気なのだろうかという遺伝学の問題から議論をしました。それを文系の学生が逆に社会環境や歴史の問題としてまた考えるとか。

あるいは近世以来の社会における、結婚戦略というものを取り上げた歴史の本を読む人が、例えば発達の視点から、人間というのは何で結婚したがるのかということを議論してくれたり、議論が非常にバラエティーに富んでいました。

昔の基礎ゼミの時代は、昔からその教員が所属している学科の学生は、その教員が出した基礎ゼミの履修はできないということで、僕のところは人文の人はほとんど来ないというふうになっていたもので、それこそ文系・理系が入り混じっていましたが、今はむしろ出している教員の所属する学科の学生が大半を取ってしまっている。だから、そういう文理の学生のクロスオーバーが実現できなくなっている。議論があまり活発にいかないというところは一つあるのです。

そういう点はありますが、IAとしては、文理融合をどう実現するか、あるいは系列の意味をどう考えるかということについて、系列の意味についてはちょっと投げ出しましたが、文理融合ということについては、いろいろなレベルがあり得るわけです。科目の中でもあるし、一人の学生が、先ほど言ったように文系の学部と理系の学部の授業を取って、そこで文理融合を考えることもあり得るわけです。一つの中でももちろんできるわけで、その一つの中でやれる場が、割といろいろな学生が混じってやれる演習という場だと思うので、そこでもう少し文理融合が実現できる工夫はないかと思っています。

以上で私の報告は終わりです。ご清聴どうもありがとうございました。

おわりに ～ 旧基礎ゼミとの比較

- 平成13年度基礎ゼミ
(報告担当者所属・報告文献および【討論内容のダイジェスト】メモより)
- 5月16日 (生活・農学科学)
アラン・フレド(田口孝夫・山本雅男訳)『同性愛の社会史 伊リ・ル・サス』彩流社 1993年
【同性愛は遺伝子の病気か】
- 5月30日 (文藝・書文)
富山本佳夫『カリヴァー旅行記を読む』岩波セミナーブックス 2000年
【死罪は是か非か】
- 6月6日 (理・生物)
大境正史『西洋捕鯨刑罰史』雄山閣 1988年
【ゴウモンの心】
(文藝・人間社会)
- M-フレイブ(三好洋子他訳)『結婚・愛欲・労働』刀水書房 1989年
【子育てと3歳児神話について】

おわりに ～ 旧基礎ゼミとの比較

- 6月13日 (理・生物)
盛崎千アイルランドの宗教と文化 4121教選容の歴史』日本基督教団出版局 1991年
【聖歌をなぜ信じるのか】
(生活・発達臨床)
- A・マクファーレン(北本正豊訳)『再生産の歴史学 1300～1840年 英国の恋愛・結婚・家制度』刀水書房 1999年
【結婚しないといけない】
- 6月20日 (理・物理)
富山本佳夫『ダーウィンの世紀末』青土社1995年
【社会ダーウィニズムは死んだか】
(文藝・書文)
- 佐藤賢一『双頭の蛇』新潮社 1999年
【友人論】
- 6月27日 (文藝・書文)
カール・オット(岸田 弘義訳)『中世の経緯・風俗・奇蹟』新評論 1997年
【歴史にのみむ女性差別について】
(生活・発達臨床)
- キース・ハマス(原本正樹訳)『家族と離婚の衰退』法政大学出版局 1993年
【占星術とホロスコープ-あなは古いを信じますか】

おわりに ～ 旧基礎ゼミとの比較

○教員が所属する学科の学生は、その教員の開講する基礎ゼミを履修できないというシステムが生きていた基礎ゼミ時代のほうが、文系理系の学生がほどよく入り交じった構成になっていた。このデータから見ると、議論もそれぞれの持ち味が生かされて、文理融合の視点が生きていたように思える。この点は、反省が必要。

お茶の水女子大学
Ochanomizu University